

〈第31回学会大会 基調講演〉

レジャー・レクリエーションと自然環境

進 士 五十八\*

Leisure, Recreation and Nature

Isoya SHINJI\*

進士でございます。私もかつてこの学会の役員をおおせつかり、『レクリエーション学の方法』という初の学会編出版をしました。昔なつかしい方も多いので、今日は雑談をさせていただこうと思っています。この後のシンポジウムの方が詳細でしょうし、多分、緻密な議論がありそうなので、私は余計なことは申し上げない方がよいだろうと思います。

私は、先週、奥多摩にあるうちの卒業生が経営している澤乃井という醸造屋さんに、学生たちと一緒に遊びに行きました。300年続いた醸造元だそうです。この澤乃井の社長の話を聞くと、お酒づくりをもちろんメインで一生懸命やっているのですけども、蔵の真下に多摩川の溪谷があるわけで、そこに沢井の里（サワイノサト）っていうのをつくっているわけです。ずいぶん昔ですが、青梅鉄道を通したとき、少し観光のスポットを作ろうと言うので、中国の寒山寺を持って来たんだそうです。小さな寒山寺は、沢井（サワイ）の駅の対岸にあります。まあ大したものじゃないんですけどね。一応、それがあって、それととなりの御嶽の駅の下に川合玉堂の美術館があるのですね。これは、庭園は中島健さんが造り、そして建物は私と同じ名前なのですが、吉田五十八という数寄屋造り建築の大家が造った、そういう名園があるのですね。寒山寺と玉堂美術館は多摩川に沿って存在するわけですが、川の

両サイドには都の公園緑地部が造った自然遊歩道が通っていてグルッとサーキュレーションができていますね。そこにさらに澤乃井の社長は「くし・かんざし美術館」というのを造りました。これは京都の舞子さんだった方らしいのですが、その方が大分お年になって櫛とかんざしのコレクションを全部なんとかしたいと言われて、相談にのったのだそうですが、膨大なものがあるので、それを収蔵する新しい美術館を澤乃井が造ったのですね。

このほか、小沢社長は美味しく酒を呑んでもらうためには、美味しい料理がなきゃいけないと言うので、「ままごと屋」という料亭を開いたのですね。澤乃井の社長は、小澤さんというのですが、小澤さんは奥さんに多摩川のほとりの料亭経営をさせたのです。いまの天皇が皇太子のとき食事されたりして、結構評判のようです。小沢さんは「玉堂美術館」の理事長も兼ねていまして、「玉堂美術館」の近くにも「いもうと屋」というレストランを造りました。こうして溪谷の素晴らしさ、やや古い寒山寺という歴史的なポイント、それに美術館を2つと、料亭をいくつかおいて、沢井の里というイメージの場所を造ったわけです。奥さんが自らつくれるのは、ままごと程度だっていうんで、「ままごと屋」とつけたと言う話でしたけど、大変美味しいユニークな料理でした。

\*東京農業大学 Tokyo University of Agriculture

醸造屋さんですから、醸造蔵を見せていただきました。元禄の蔵という元禄時代に造った蔵があり、それから明治の蔵、現在の平成の蔵というのが、次々出ていまして、お酒とっても美味しかったです。澤乃井の酒を知っている方はおられますか？ラベルがなかなかいい字ですよ。普通、お酒のラベルは毛筆の字が多いのですが、切り絵作家にやらせたのだそうです。だから非常に印象深いですね。多分沢蟹をイメージしたのだと思うのですが、カニが2つ付いています。

ラベルは当主が自分のアイデアで作ったのだそうです。が、誰かが蟹は横に歩くから商売が横ばいになってしまうといったとか。横ばいになっちゃまずいので、蟹は酔っ払うとまっすぐ歩くんだから、酔っ払った蟹にすればいいというので、赤い色を塗ったそうです。私は先週の日曜日の話をしてるだけでもありますけど、何が言いたいかと言いますと、自然環境というのはそういうものだと思っているのですよ。つまり、美味しいお酒があって、歴史もあり、自然もあり、美術館もあって、なによりもいい季節、ちょうど紅葉の時期ですから、もみじが真っ赤に色づいておりましたし、落葉（らくよう）がたくさん、足でそこを踏んで歩くわけですから、その時の感触はとていい。私がいま思っておりますのは、分析的な方法論で物事を考えるのは、そろそろよしとしないとまずいということです。いかに、総合化するかという話だと思っているんです。そういう意味でいかにして分析的方法から脱却するかを、少なくとも学会の研究者集団は考えるべきだと、これが私の今思っておりますテーマです。

たとえばこの千葉大のキャンパスも、いま大変きれいに色づいております。となりにある歴史公園の戸定ヶ丘公園ですが、これは水戸の徳川さんがここに別邸を構えたのです。明治期の邸宅庭園の名残です。なんで、こういう不便な丘の上に作ったかという、多分、絶好の眺望地点だったからでしょう。松戸というのは、昔は、まさに、水郷の風景というか、すばらしい風景地だったんですね。明治になって郊外の風景地に屋敷を構えるというのが流行ったのです。私は、東京農大ですから、世田谷ですが、世田谷の国道246号線の脇にも同じように水戸家は屋敷を構えたのです。明治になったあとです。それは、やっぱり眼下に多摩川を臨み、遠くには富士山が眺められるわけです。そういう全体的にすばらしいところに、昔は屋敷を構え

たのです。その並びに、静嘉堂文庫というのがありますが、これは、三菱財閥の創始者の岩崎さんが、そこに屋敷と墓所を構えたのです。つまり、環境というものをトータルに感じ取っていたわけ。そういう場所に暮らすことを良しとしたわけ。自然環境の重要性といういい方は、本当は、そういうものだとは思いません。ところが、研究者がやりだすと、なぜ、紅葉か？カロチンという物質がどうか。植生構造は？とか。急にそんな話になってしまうのです。目の前にある美しい風景を味わう能力を、ほとんど失ってしまって、なんかそういうふうな、分析にいつてしまうように思います。

近代科学というのは、物事を分化して、そして深く掘り下げるという方法論を取って来ました。特に、自然科学は、それを絶対視して来たと思うのです。この研究態度は、ある程度までは、成功したと思います。そのおかげで近代の科学技術文明は、成り立っているわけですから。ただ、それが人間自身の力、人間力を大幅に衰退させたのではないのでしょうか？私はそんな風に思っているわけです。今日のテーマである「レジャー・レクリエーションにおける自然環境の意味」は、究極的にいえば、このことではないかと思えます。どうやってトータルな感性を復活させるのか、自然環境との付き合いの意味は、衰退した現代人の力をどうやって取り戻すのかということだと思っております。

観光とかレクリエーションのことを、私もこの学会で研究してきました。そして今、いろいろな反省をしています。

30数年前、観光でいいますと、見る観光からする観光へということ、標語のようにいつたわけですね。見ているだけでなく、何かやるということです。最近の市民活動を見ていると、そういう流れになっていて、ガーデニングからファームिंगへというのもその流れでしょう。ガーデニングは、美しい花を身近に置くということですが、ファームिंगは植物を育てて、野菜とか果物を採って食べるまでやるのです。美しいものはいくらでも安く売っていますが、自分が育てて

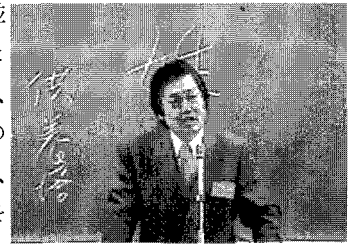


写真1 進士五十八氏

得たそういうトマトの味は、また格別なわけで、そういうものを求めてガーデニングからファーミングに移りつつあるように思います。

ところで最近、今日のシンポジウムの資料にも書いてある様に、「近年とみに自然に対して、みなさんの関心が高まっている」という書き方をしているわけですね。この近年っていうのは、30年前にも近年とみに自然環境に関心を持って来たとか、アウトドアレクリエーションというものに非常に関心が持たれて来たとかいって来たのでして、ずっと近年なのです。いつも学会人というのは、近年とみにこういうものに関心が高まって来たという言い方をして、自分たちがやっている研究が、大事だということを、位置づけようとしているのです。実際、近年高まっているとは思いますが。しかし反省しなくてはいけないのは、そういう言い方、考え方です。自分たちが研究していることは、世の中が一番求めている大事なものだと思っている。プロの研究者には、そういう職業病があると思います。自分の研究分野だけが、世の中で一番大事なテーマだと思っているのです。それ以外はもう、目に入らない。話も、自分の研究室の予算にプラスになるかどうか、そういう判断ししません。

これは、大学だけではないと思うのです。現代の組織はほとんどそうになっているはずですが。それは、最初に言った、分業化のありかただと思うのです。だから、ちょっとおおげさに結論を言ってしまうと、レクリエーション、あるいは、レジャーにおける自然環境のあり方を論じるには背景にある現代社会のシステムが問題になると言うことになります。分業化し、専門化して、自分のパーツだけを頑張るといような、そういう組織システムがもたらした人間の劣化です。人間というのは、本来はトータルなものですから、そのトータルな人間がどんどん劣っていったのだと私は思います。そういう言い方をすると、昔は見る観光、今はする観光に変わったとかそういう言い方は、歴史を発展的に見る発展史観だということがわかります。これは、先程の近年と同じです。人間は実に身勝手ですね。自分がある時代が一番発展していると思っているのです。昔より今がもっと発展したと思っているわけです。これから先もっと発展するだろうというふう考えるのです。東京農大的発想でいましょう。百姓大学言われていることを、誇りに思おうと私は学生諸君に言っ

ています。

私は定義しています。百は沢山です。百姓の姓は、「かばね」。「かばね」は名字で、名字は職業、だいたい職業を表します。外国でもカーペンターとかカーターとか言いますが、「かばね」には石屋さんとか運送屋とか色々な意味が付いているわけです。私の名前、進士もちょっと変わっていますが、これは役人です。だいたい名字は、その人の職業を表していたのです。職業が特化していくのは、ある分野の能力が多少他より優れているところがあったためでしょうね。そういう意味で、私はたくさんの能力がないとできない仕事が百姓だと思っています。そう言えば、現代人はみんな二姓か三姓ですね。レジャー・レクリエーション研究しかできない学会人は一姓ですね。それで一応家に帰って料理も出来るなら、二姓になるわけだし。家族の肩でも揉んでマッサージ業がやれば三姓ぐらいになるわけです。というように、人間は本当はたくさんの能力を持って生まれているはずですが、社会が分業化して管理化されていくと、そのうちの特定の能力にだけペイされる、お金がもらえるということで、それ以外のことは、やめてしまうわけです。まだ、それでもしつこくやめたくない人だけがアフターファイブにいろいろやるのです。日曜百姓、日曜市民農園が成り立つのは、正にその意味です。日曜日にだけは百姓になろうとしていると私は思います。つまり、日曜と日常を区分して、日常は特定の仕事しかないから、日曜ぐらいはそうではないことをやるのです。自分が持っている身体の中にあるすべての能力をやってみようとするのです。コンピュータールームに4日間入り込んでいるような人たちは、外に出て、土をいじって、ものを育ててみるのです。これはやったことのない体験なのです。ただでも、それをやるのが日曜百姓です。

自然環境が求められて来た背景には、近代以降の都市では、ほとんどが内部化され、空間的にはまずありとあらゆる仕事が室内で行われるようになって来たことにあると思います。だから、アウトドアに何かを求めるのでしょうか。自然環境の意味のひとつは、アウトドアということ。アウトドアレクリエーションという言葉をさかんに使うのは、そういう意味だと思います。

人間は本来、中でも外でも、働いたり、生活したりしてきたはずなのですが、今は、完全に環境をコント

ロールして、暑ければ涼しくするし、寒ければ暖かくして、暗ければ照明をつけて、人工的な環境を作ります。しかも、今では究極までつき進んだものですから、いまの立派な建物の建築工事の6割くらいは、設備費になっています。今の環境をほとんど機械的にコントロールしているということです。人工環境の中に、長時間徹底してすごすようになったのは、歴史的に近代が初めてだと思います。それが現代です。だから、アウトドアすなわち自然を求めるようになったと思います。

もとの百姓に戻りますが、そういう現代人は、非常に管理化された人工的な環境の中に押し込められて、人間の身体の中にある能力のほんとに一部だけを提供して、毎日を暮らしているわけです。だから、そうでないものを、どのようにして求めるかという話になっていったわけです。

たとえば農業は、本来アウトドア産業であったはずですが。自然の中で、ものを生産するのが、本来の姿だったわけです。この11月に農の多面的機能について学術会議が農水大臣に答申しました。

この農の多面的機能というのは、みなさんよくご存知のように、たとえば、水の涵養、つまり降った雨を受け止めて水を溜めるということや、土壌の保全、緑がCO<sub>2</sub>を吸収し、温暖化を防止するという話です。それを多面的機能と言っています。

多面的機能は林業でもそうです。林業も国土保全をやっているわけで、木材を生産するだけではなく、そういう環境を保全する多面的機能を持っているから大事だっていうのが、今の論理です。

林業はさすがにそのままですが、農業はほとんど工業化してしまいましたね。温室を作ってその中で重油を燃して、真冬でもトマトが食べれるようにしているわけですから、これはどう見ても無茶苦茶です。つまり、農業の工業化ですね。だから、栄養が足りないというので、化学的な肥料を与えるわけです。永田農法とかいって、肥料を一切やらないで、野菜自身の生きる力をひきだすことで、ホンモノの味をつくるという農業が見直されているのも、こうしたことへの反省のあらわれでしょう。

このあいだの狂牛病騒ぎというのは、自然の摂理でいえば共食いですね。自然というのは生態系が出来ていて、生態系の原理では、弱者は強者に食われながら、

エコピラミッドを作っているわけですからお互いに食べられていくのですが、少なくとも、同じ種類同士は、そういうことはしません。同じ種類同士だったら、その種は絶滅してしまうのがわかっているわけです。そういう基本を、なぜわからなくしてしまったのか。なぜ、牛が牛の骨粉を食うような羽目になったのか。これは簡単なことです。北海道の牧畜家、酪農家たちは、あれは国の責任だと言っています。国の責任でももちろんありますが、これは近代文明の責任です。つまり、全部、縦割り化して他のことは知らないからです。牛の餌は、昔は百姓たちが草を刈ってやってたのです。山形県置賜地方に行くと草木供養塔という石碑が立っています。上杉鷹山という人が、草や木のお陰で、人間の命は保たれているのだから、これに感謝すべきだという精神運動をやり、草木供養塔という碑を作っています。私はこれを面白いと思うのです。動物の供養塔は結構作るんですけど、草や木を供養する思想は、山形県も置賜あたりだけです。上杉鷹山だけではなく、おそらく土着の百姓たちの思想だったと思うのです。それを形にしたのが草木供養塔です。いずれにしても、自然に対して、そういうとらえ方をしていたのです。なんとなく動き回るものは命があって、切ると血が出るから可哀想というのに対し、植物はちぎっても血は出ませんから、だから生き物だという自覚がなかったかもしれませんが、ここがすごいと私は思っています。世界的に見てもこんな例はあまりないだろうと思います。植物の命を、形としてちゃんと認めようとするのはですね。

こういう生き物に感謝するという気持ちは、擬人化といえますか、自然に対して人間と同じように見るとい見方です。これは近代科学ではありえないのです。人間と自然は違うのですから。けれども、自然を見ながらそこに、人生を見る、読みとるといような、そういう見方はきわめて東洋的というか日本的だと思いますが、そういう自然観を我々はどうか考えたいのか、こういう思想は分析的な方法では出ないのです。そういいながら、ちょっと矛盾するんですが、12ページ以降の絵(基調講演配布資料)はみんな、その分析的なものです。自然がいかに大事か、一応整理して構造を示そうと努力しましたらこうなりました。こういう説明は小学校段階だと思いますが。

でも、小学校の段階も必要なので、仕方ありません。

学会活動をやっていくとそれが判ります。本学会の役員をさせていただいた時に、『レクリエーション学の方法』という本を作ろうと、がんばったわけです。「レクリエーション学」などと言うのなら、学の体系化目指さなければ学会といえないとあの頃は、ムキになっておりました。「レク行動」とか、「レクの空間」とか、「資源」とか、確かその様なものを体系化しようとしたわけです。

こうやるときは、どうしても分析的に構造を作りながらパートに分けなければ形になって行かないのです。私はその様な方法を、小学校か中学校、義務教育のレベルだと思うんです。そろそろ、そういう意味では大人にならなければいけないと思います。いろんなものを分けて考える方が扱う範囲が狭いですから楽ですね。それを一生やっていけばよいなんて、大学人はいい商売ですね。しかし昔の百姓はなんでもやってたのです。自然の力を読んで、農地を造成して水田を拓くというのは、水のことも考え、日当たりも考え、どうやって土地を広げてお米を作るかという装置を開発して行くわけですね。土地を読んで、そこでお米を生産する条件を整えなくてはいけないわけですから、それは結構大変です。今は土木とか、機械とか、農薬、肥料とか、流通とか、いろんな分野に分けてやっているわけですが、昔の百姓はそういうことをすべてやったわけです。

生きていくためには、生活の場をちゃんとしないではいけませんから、建物を作り、まわりに庭や菜園を作り、そして、風から守らなければならぬので屋敷林を作りました。

肥料が無いところでは、里山（サトヤマ）を作って、落ち葉がたくさん落ちるクヌギやコナラの木を植え、その落ち葉で堆肥を作って肥料にしたのです。埼玉から栃木にかけての北関東一帯は、そうやってできた風景です。二次林の風景はそうやってできたのです。里山という二次自然との付き合いが発達するわけです。農業は、特にヨーロッパでは、有畜農業が常識ですが、日本では家畜を飼わない農業があったのです。北関東はそうでした。ですから、家畜から得られる有機肥料が無いものから、落ち葉を積み上げて肥料にするわけです。いわゆる堆肥にするわけです。そのためには落ち葉を集める膨大な平地林が必要だったわけです。平地林には風を防いで作物の成長を助けるという意味

もありました。防風林がある場所と無い場所の生産性は30%も違うのです。ですから、農地を潰して防風林を作っても、農業の生産性がアップして、総量としては収量が上がるという考えなのです。北海道やシベリアに行くとき更に防風林が発達しているのはそのためです。環境が厳しければ厳しいほど、そういう環境を作っていくわけです。

今、たとえば帯広を旅行して、みなさんは、あの風景をそうやって読めるでしょうか。多くの方は「あぁいいね」、「あ、きれいだね」で終わっているわけです。自然環境を味わう、そのあたりまで物を見てくれなければ、人間生存との関係で本当の感動は得られないでしょうね。人間が生きていくために防風林やら堆肥やらを手間暇かけて作ってきたのだということに思い至って、感じなければいけないわけでしょう。

百姓たちはそうやって農地を作り、屋敷を構え、風から自分たちの住まいを守って、生きて来ました。話にはわかりますが、「村祭り」という歌があります。そこには村の鍛冶屋が出て来るわけです。なんで村には鍛冶屋があったかです。大坂の向う堺辺りには鍛冶屋がたくさんありました。刀鍛冶、鉄砲鍛冶です。彼らはとても腕がいい。現代風にいえば、ハイテク技術の集積地です。だから堺で生産して、全国に流通させたほうが、ずっと質の高い農具が行き渡ったはずですが、なぜそうしなかったのでしょうか。それは農地は全国同じではないからです。土が違います。粘土質から砂っぽい土まで、ねっちょりしたのから、サラサラしたもの、いろいろな土があるわけです。それを耕すためには、粘っこい土には、粘っこいの抵抗の無い鋤の形を作らなくてはいけなかったのです。だから、農具はそれぞれの農地に合わせて、村の鍛冶屋で特注したのです。特注が当たり前のですね。鍛冶屋さんに、「ここ、もうちょっとこっちへ曲げてくれよ」とか、「この幅広げろよ」と、注文する百姓は言ったのです。そうやって作ったから非常に合理的な農具が出来たわけです。それから農民にも、手の長い人もいるし、短い人もいます。手のひらが小さい人も、指の長い人もいるわけです。鎌ひとつでも、草を刈る鎌、野菜の収穫に使う鎌、稲を刈る鎌は違うわけで、最小限の労力で、具合が良く、しかも自分の手の太さや力、身長に合った鎌を作らなければいけなかったわけです。これが最も合理的だったわけです。農民、個人個人に

合った農具を打たせたのです。だからどの村にも鍛冶屋が必要だったのです。

ところが、現代は、一カ所で大量に生産して配っています。私は一方的に現代はいけないと言っているではありません。かなりは成功しているのですが、根本のところを考えたいと思ひ色々な例を申し上げています。一人一人は人間が生きていくことの本質を考えなくても、社会全体で生かしてくれてしまう。社会みんなで面倒をみてくれてしまう。福祉国家という一連の政策かも知れません。なんとなく、ボンヤリしていても、生きていける状況を作って来たわけです。これはある意味で福祉の前進かも知れません。しかし、福祉というのは本当にハッピーに生きるということです。こう考えると、果たして一カ所で大量に作る配ることが本当にハッピーなのかということです。自分で、鍬や鎌をあつらえて、実際にそれで労働をしてみても、「ああ具合良くいったなあ」という達成感のようなものは、現代は誰も味わえないわけです。この傾向は衣・食・住のすべてに通じています。人間が生きる基本は、衣・食・住を自分で満たすことであつたと思います。自分でやりきれないから家族の手を借りて家族労働でやったと思いますし、家族でできないから村で結を作って仲間でやったと思うのです。しかし、それがひとつずつ崩壊して、家庭も崩壊して、コミュニティも崩壊してきたわけです。高い税金を取ってみんな役所がやってくれてしまうということも背景にあると思います。ですから、自分で手応えを持ちながら生きることができなくなっているわけです。今の社会はそこが難しいところです。私はずっと、そう思って来ました。

私には子が二人いるのですが、まだ娘が小さい頃、私も造園家の端くれですから、公園で自由に遊びながら育つというわけにはいかないかと考えていました。日比谷公園のネイチャースタディーをちょうど調べていた頃でした。末田ますさんという人が、公園における児童指導、いまのプレイヤーのはしりをやっていて、そのことを調べていたところだったものですから、「幼稚園なんか止めろ」と子供にそう言っていたのです。最初はその気になっていたのですが、近所の子の様子を聞いてみると、みんな幼稚園に行くらしいし、幼稚園に行かないと、うちの娘だけ一人ぼっちになってしまうわけです。遊び仲間がいなくなって遊べ

ないわけですね。社会がそうなってしまうから自由に自分だけはこういう生き方をさせようと思ってもできない。娘は結局幼稚園に行ったのです。情けない話ですが、そういうことです。だから社会というのはいかに怖いかでもあるのですが、しかし、そういう社会に矛盾や問題を感じないでいいのかもしれない。こうした社会に迎合して、それが発展だと考えているふしがあります。近年は自然環境が求められていて、それに対するプログラムを提供しておけばそれでいいかという、ちょっと楽観的な流れだけでいいのかわかもう一度考えてみたいと思います。

自然保護運動のパイオニアの一人である柴田敏隆さんの話です。彼は野鳥が専門ですが教育論をたかかわせたときのことで、彼は老衰の代わりに、幼くして衰えるという幼衰という言葉を盛んに使いました。老人になって衰えるのは、生理的で当たり前ですが、今の子供たちは、子供の頃からもう衰えていて、それは体験が無いからだと言われました。柴田さんは、三浦半島で一所懸命、自然保護運動や自然観察を实践した人です。幼衰という言葉は象徴かも知れませんが、一種の文明批判として聞いておきたい言葉です。そこで私は、子供の頃からいろんな体験がやれるような、社会にならないものかと思っています。

たまたま、去年の春、風土社から『生き物緑地活動をはじめよう』という本を出しました。この本は日本財団がその前2年間ぐらい研究会を行い、私を取りまとめをやって、みんなで作った本です。

今、NPO法人が、雨後の竹の子のようにたくさん出来て来ています。そういうNPO法人が、環境を改善するとか環境と触れ合うとか、環境との関係で人間自身を、自分自身を変えていくといった活動を行っています。そういうNPO活動を支えるためのノウハウや運営方法の入門書としてまとめたのです。ところで市民層というか、たとえばお母さんたちが非常に元気に活動しています。これは、よいことだとは思っています。しかし、それは昔の百姓たちに近づこうとしているだけで、別に現代人が立派になっていると思うと大間違いです。今はあまりにも自然や環境とふれあうという生活環境に無いから、そのことにあこがれ、自分自身を回復するためにやっているのでしょうか。昔は、日常の中に自然との付き合いはあつたわけで、少なくとも近世以前の日本の生活は完全に自然の中で生きて

きたわけです。自然のことすべて、動物も植物も土地のこともあるいは気象のことも、それがわからなければ生きていけなかったわけです。だから、当時「自然」といえば富士山のように特殊な自然でした。フジは、不死と書いたわけです。永遠のシンボル不二としての富士という、大きな山を霊山として崇めるといふ、そういう特別なものだけが自然だった。海もそうです。日本三景は、奥州の松島、丹後の天の橋立などで、わざわざ船で行かなければならない特別の自然であったわけです。わが国初のソーシャルツーリズムはそういうものを目指したわけです。日常では、当たり前自然を体験しているわけですから、そうでない自然という特別なものしか無かったわけです。観光地というのは、そういう、とてつもなく大きな山とか、素晴らしく美しい風景とか、そういうものであったわけです。それが観光の目玉だったわけです。今の我々は、そういうものをテレビの情報でみんな得てしまっていて、頭でっかちになっており自分の身体を動かしてはいないわけです。だからこそ、身体を動かして体験をしたい。見るだけでなく、作ってみたい、育ててみたいということにまでなってきたと思うのです。これは、先程も言ったように人間が衰退しているからだと思うべきです。その衰退した現代人がなんとか、もう一度まともな人間になりたいという運動がNPO活動にみられる多彩な活動ではないかと私は思います。決して、現代人の方が発展したと思ったり、昔の人より立派になったなどと思ったら大間違いです。こここのところをキチンとわきまえておきたいと思います。我々人間は、つい、現代は昔より成長し発展したと思いたがる。過去を否定的に見て、将来は発展だという進歩史観に立ちたがるわけですが、私はそれは、あまりにも傲慢だと思います。今、我々がやるべきことは、当たり前であることです。たとえば学校教育の中でいかに体験出来るような場所を作っていくか、どういう風にしたら今の少子化の状況のもとで学校の先生方が、総合的学習の時間に、特色ある教育をする体験の場づくりができるかです。メーカー的な発想で、他の学校に無いユニークな体験プログラムを作ること、そうするとほめてもらえるのではないかと、また話題になるかも知れないと色気ばかりが多い気がします。一つのテーマでやる方が特色が出せるわけです。だけど、これは子供にとってみれば迷惑です。いつもいつも紙バック回収

というわけではない。本当は、トータルで自然の体験も、リサイクル運動も、それ以外のことも、さまざまなことを体験することが大事で、そのことを忘れてはいけないと思います。

人間にとっての自然というのは、人間が生きるための必須アイテムです。レヴィ・ストロースの『野生の思考』の言い方を借りれば、植物の中には葉っぱにも、実にも、根にも名前がある植物もあるし、1つも名前のない植物もある。万国命名法なんていうのを、開発する以前の話です。人間は、根を絞って染料を取るとか、これを飲むと下痢したときに治るとか、そういう役に立つところに名前をつけたわけです。だから、根っこも実も花もみな役に立つ植物には、5つも6つも名前があるし、人間にとって無縁の植物には名前がついていない。人間はそんなふう自然と付き合ってきたのです。レヴィ・ストロースの『野生の思考』は、そういう理解の仕方をしています。私はとても大事なポイントだと思います。「人間にとって自然の意味」を考えると根本だと思います。

我々人間にとって、もっと限定して、レジャー・レクリエーションにとって、自然は生きることそのものだと思うのです。レジャー・レクリエーションのプログラムをつくる時にも、人間が生きるという、生存の原点に戻して考えることが必要だと思います。私の立場、つまり造園の世界でも、昔の庭は作業場として農民がそれこそお米や粉を干したり、大豆を干したりする場所としてあったと庭の原点を位置づけるのです。それがだんだん飾り立てられ、きれいになって、石組みが作られて象徴的になり、いわゆる日本庭園と称するものになっていくのです。実用性からだんだん象徴化されていくという歴史があるのです。何で石組みで鶴だとか亀だとかを作るのでしょうか。それは人間は永遠の命を得たい、逆に言えば人間は必ず死ぬという生き物だからです。そのように人間の生死問題として、鶴亀鳥島を理解すれば、理解しやすいですね。ところが学校の庭園史は、そうじゃない。須弥山、蓬萊の思想とか、何かよく判ったような判らないような、そういう説明ばかりやっています。人間は必ず死ぬ存在だからこそ、永遠に生きたいという願望があって、それを庭のなかに象徴的に作ることによって、心の平安、安心を得ようとしたのだと思うのです。

環境を作るということは、そういうことだったので

す。洪水に襲われれば流されてしまうわけですから、石垣を積んで、そして家を作ったのです。先程も言いましたように、暴風が来たら困るから防風林を植えたわけです。これらは全部、「生」という、人間が生きるということの根本から成り立っているわけです。私は、レジャー・レクリエーションといえども、そういう観点からみるべきだと思います。これが、だんだん抽象化されて、単なる頭の体操になってしまって、ゲームセンターみたいに無理矢理新しいソフトを工夫して作り出すという状況になってはいけないと思うのです。バーチャルになりすぎて、バーチャルの中で生きさせられる状況の中に我々は置かれているような気がします。体験第一教育の話はそのくらいにさせていただきます。

さて、私は1999年に『風景デザイン』という本を共著で出しました。これは、どのように景観をつくろうかということが、きっかけです。景観条例が、現在600くらいの自治体で出来ており、景観がさかんに言われるようになりました。もう20年も前でしょうか、もっと前かもしれませんが、埼玉県の下山、平地林を守るために、郷土景観という言い方で地域の自然環境全体を守ろうと考えました。県の人たちと郷土景観条例を作れないかと取り組んだのです。ところが残念ながらこのときは認めてもらえませんでした。埼玉県庁には文書課というのがあって、この人たちは、景観という言葉は、行政用語には馴染まないと言いました。法律用語には馴染まないと言い、景観という言葉は条例名につけるのを認めなかったのです。埼玉県庁の法律家はそうだったのですが、10年ぐらいしたら、神戸市で景観条例が出来るのです。同じ行政で違うのは面白いですね。とうとう景観条例ではなくて、ふるさと埼玉の緑の保全と回復の条例、すなわち緑化条例になってしまいました。そんなことから言うと、隔世の感があるのですが、景観条例を制定している自治体が、今では600もあるのです。そんなことで、景観をどう考えるかを本にしようとして考え出版しました。

ここで、私が言いたいテーマは、総合性、トータルティということですが。景観条例制定が、なぜ盛んになって来たのか。法律にはならないとまで言われたものが、今、何百もの自治体条例として、進んでいる状況はどうしてか。それは、やっとなお役人さんたちも、ものが見えるようになって来たということですが。これま

での行政は長い間道路だけを整備する、公園だけを整備する、あるいは文化会館を整備するというように、タテ割で個別ばらばらにそれぞれを整備して来たわけです。そうやって、街の要素、つまり都市計画施設と言いますが、そういう要素は出来てきたのです。けれども、全体を見たら、「何だこれ」、「つまらない」、「何とみともない街だ」って他からは見えるような整備だったことに気がついたわけです。これは、どうも、ひとつひとつの要素だけをいくら頑張ってもダメで、それを有機的に結びつけ、ひとつのトータルな街として、風景として、見ないといけないのだということにやっとな気がついたわけです。それで、景観まちづくりを考え始めたわけです。これが、景観条例や風景条例だと思います。

『風景デザイン』という本の、サブタイトルに私は、「感性とボランティアのまちづくり」とつけています。これは、結構必死で考えました。この「感性とボランティアのまちづくり」というのは、ちょうど、21世紀に入る直前だったものですから、21世紀前半のテーマは何だろうと、一生懸命考えたのです。もちろん景観条例、景観計画、景観運動とかいろいろな言葉があって、その本を作るのだから風景には関係しなければいけないのですが。ボランティアとか、感性という言葉は直接的にはつながる言葉ではないんですね。けれども、やはり感性を取り戻す時代かなあというのが一つありました。参加という言葉が盛んに使われていますが、やはりボランティアという言葉も、もう一回見直すべきと思いました。それで、この「感性とボランティアのまちづくり」というサブタイトルをつけたわけです。

「感性」のほうは、さきほども言いましたが、澤乃井に行き、もみじの中で十分冷えたお酒をいただいて、足で落葉を踏みながら、多摩川の水の音を聞き、まさに五感で感じる環境体験をして、本当に気持ちがいいわけです。私たち現代人も、こういう環境の良さを味わうだけの能力を持たないといけないと思うのです。近江八景とか、金沢八景というのがありますが、あれは、もともとは中国の瀟湘八景から来ました。この瀟湘八景のひとつに、瀟湘の夜雨というのがあります。夜の雨です。現代の常識では雨を避けるためのまちづくりをしています。地下街、後楽園ドームのように、とにかく雨から避けようと思えば考えます。田



舎の目抜き通りであるなんとか銀座でも、アーケードを作って、みんな雨を敵視しているわけです。とにかく現代は雨が嫌いらしいのです。東京ドームに大勢の人を集めてイベントを打つには、雨が降ってお流れになると払い戻しが大変でしょう。これも現代文明のシステム作りに問題があるというところへ行くことになるのです。ところで、昔の人たちは、夜の雨をこよなく愛したわけです。近江八景では唐崎の夜雨、横浜の金沢八景ですと、小泉の夜雨と言うんです。小泉というのは、昔、伊藤博文が明治憲法を作るときに滞在した場所です。その小泉に降る夜の雨を味わい、風景の一つとして評価しようという見方を昔は持っていたのです。つまり、雨も、嵐も、あるいは雪も全部同じ価値だったのですね。ですから、近江八景でも比良の暮雪とか、堅田の落雁とか、そういう風景、情景がたくさん出て来ます。近江八景に浮御堂というのがあります。琵琶湖の上に突き出た形で建っています。それがモデルになって庭の雪見燈籠に変わります。浮御堂のあるところは、堅田という地名ですので、堅田の落雁の風景が八景のひとつに選ばれ、評価されているのです。堅田では、ムギコガシで作ったラクガンのお菓子を売っています。落雁について、画家は雁が下りてくる絵を風景に描いているし、詩人は詩に詠んでいます。商売人はラクガンを作って売っています。ラクガンを食べると、あの香ばしい香りがするわけです。こういうもののトータルが本当の自然体験というものです。そういうことを含めてはじめて全体だと私は思うのです。

住んでいる街とか、年代によって、また、それぞれ自分の立場からの感性があって、それで、環境をトータルに受け止めているわけです。あるいは、積極的にそういう風に働きかけているわけで、働きかけることによって、自分の生というもの、人生というものを、まっとうしようとしているといえます。

つまり、自己実現というレジャー・レクリエーションの原点に戻ります。このようにして、人々は環境をトータルに体験しながら自己実現を図ろうとしているわけです。

現代人の知力や体力の劣化、衰退を問題にしたいわけです。私のように、庭園史をやってきた者から言うと、庭園の中には、たくさんの教養が無いと理解できない仕掛けがいくつもある。それらはほとんど現代で

は通用しなくなっています。その分野の教養が失われた証拠でしょう。その教養は、生活の中で教わったわけで、学校で教えてたわけでは無いのですね。飛び石の真ん中に、沢庵石みたいなものを棕綱縄（シュロナワ）で縛ってある。これは関守（セキモリ）石といって、この石よりさきには行っはいけないというサインなのです。このあいだ金沢の兼六園へ行ってそれを誰も知らないということがわかりました。ある著名な人のマネージャーで、かっこいい女性が「なんであんなところに石が置いてあるのか」と言いました。常識の欠如というか、いや、もう今はそういうのは常識じゃないのでしょうか。そういうことが、実はたくさんあるのです。植物の名前とか、動物の名前とか、そういうものだけを自然教育と思っている人がいるかも知れませんが、私はそうは思いません。自然を読むときに、その裏にある文化を読んで欲しいと思います。私は、明治神宮の神社林の造園に関わられた、上原敬二先生に学生の頃からずいぶんお世話になりました。上原先生の樹木学の講義で一番印象に残っているのは、樹芸文化について言及されたことです。ですから、私は、造園樹木学担当の先生たちには、いつも、樹木の植物学的解説ばかりで、葉っぱがどうだとか、毛が生えているとか無いとか、形態学や分類ばかり、ただ名前を覚えれば良いという教育はいかなものかと申し上げております。

たとえば、クチナシの実ですね、クチナシの実の汁は、黄色いですね。福岡の八女におじゃましたときのこと、黄色いご飯が出ました。農家は、夏ご飯が腐りますので、クチナシを使って黄色いご飯を炊いています。あれは防腐剤です。普通なら朝炊いたご飯は夜になると腐ってしまうのですが、クチナシの実の汁で炊くとお昼も夜もまた食べられるわけです。つまり、クチナシにはきれいな白い花、それに黄色い実がなって、それは染料、防腐剤、お歯黒になるのです。これが文化です。そういう話を、造園樹木学では教えるべきだと思うのです。そういうのが無いのです。いまの先生は、そういうことを知らないのです。なぜかという、重箱の隅型の研究論文で学位をとっているだけの人が多いからです。研究者は、そうやってしか生きられないようになってきているのです。学会誌の査読では、ロジカルに出来てることしか認めないものですから、みんなそれに合わせるわけです。私はそうではないつもり

だったのですが、やはり論文は、論文として通りやすく書きました。しかし、自分の生き方はそうではないようにしようとやって来ました。ところが、今の大学院生を見ていると、みんな論文に合わせて自分まで変えてしまいますね。だから、考えが狭くなって、つまらない人間になってしまっています。大学院へは、進んでもらいたいのですが、問題は、そこでの学び方です。考え方を狭くしてしまったらダメなのです。東京の下町、木場の緑の貧困な環境で育って、デザインにだけ関心があった私でしたが、上原先生はナンテンは災害を転ずるといっているので、どの家にも植えたのだとか、そんな話をたくさんされたのでだんだん樹木が好きになったのです。これこそが本当のインタープリテーションですね。それを単に自然教育だとか、国立公園の自然保護の思想をちゃんと教育しなければいけないというだけになってしまうと、硬いというか、ツマラナイと思います。どうも、目的化してそれを尖鋭化して深くするという思想、そして、それが人間の発展だと考える価値観が、実はトータルな自然の素晴らしさを味わうという感性を無くしてしまったように思うわけです。

『風景デザイン』のもう1つのサブタイトルに「ボランティアのまちづくり」とつけたのもそこでした。現代人は、先程も言いましたように、二姓か三姓に対してサラリーをいただいているものですから、その領域だけで一生懸命働くわけです。しかし、残りの六十姓か九十姓は、不毛のままです。特に、専業主婦のみなさんはそうなってしまいます。自分で働く必要がないわけですから、自分で生きる実感が無いわけです。今は、第3期ボランティアの時代です。私は、たまたま社会福祉協議会の人たちのおつきあいが助手の頃からありまして、30年近く前に東京ボランティアセンターの運営委員をやったことがあります。そのとき『緑のまちづくりボランティアの手引き』を作ったことがあるのです。当時のボランティア精神は、キリスト教精神による崇高なものでありました。病人とかハンディキャップの人をなんとかする、弱者救済ということがボランティア活動でした。私は、東京の下町に育ったものですから、どうも、そういうものに馴染めなくて、あれは偽善者じゃないかと、内心思っていたのです。それで、緑のまちづくりボランティアというのを提案して、ネイチャーゲーム、ネイチャースタディ

をして公園で楽しく遊ばばいいのではないかと思い、一種のレクリエーション的な思想を入れて、「緑のまちづくりボランティアの手引き」を作ったわけです。

時代は変わって、昨今ボランティアと言っているほとんど全部は、私が昔思ったようなものになってきたようですね。人のために尽くすというより、自分が楽しむ、その結果、みんなが良くなれば良いのではないかということになってきたように思うのです。そういう意味で、新しい時代のボランティア活動は、レクリエーションが極めて有効だと思います。レクリエーションは、なんでも受け入れていくことができるでしょう。私がさきほど申し上げた『生き物緑地活動をはじめよう』の編集では、会員の集め方、会則の作り方とか、NPO団体の作り方、寄付金の貰い方、活動のフィールドの確保の仕方、役所とのつきあい方とかを、全部入れたのです。それは、企業・職場つながりとか、大学、学校つながりではなくて、NPO支援つながり、あるいは趣味つながりなど、横割りの市民グループがたくさん出来てきて、その人たちは、まさに生き甲斐を求めて、私風に言えば、百姓人生をなんとか自分も達成したいと行動しているのだと思います。一姓か二姓に縮まったサラリーマンも、専業主婦の方たちも、高学歴化と高齢化の中で人生目標をどう掴むか、そういう観点からボランティア活動に入り込んで来ているのだらうと思うのです。従来の枠を壊して、本当の意味で人間らしく生きる、トータルマンを目指しながら生きるという、そういう運動のためにボランティア活動は、びったりではないかと思えます。

たまたま、6、7年前から川崎の多摩川エコミュージアムの計画の委員長を引き受けて来ました。川崎は公害都市だったということもあり、市民運動がたくさんあるのですね。色々な関心事、たとえば多摩川の自然を守る会の横山さんは、日本の市民的自然保護運動の走りですけども、そういう川の運動をはじめ、水源地を守ろうとか、里山を生かそうとか、野草がどうだとか、多摩川に桜を植えようというグループもあり、もう実に多様な市民グループがあるのです。色々な緑でこれらの方と長年おつきあいをして来たもので、その人たちを集めて、環境市民的ボランティア活動って言うてもいいし、歴史から自然・文化まで幅広いグループが集まるイベントとしても活動してもらい、市民同士で教え学び交流する活動の総体を「エコミュージア

ム」だと考えたわけです。それを一元的に「多摩川エコニュース」で流して、さらに新しい市民に参加してもらうという方法をとりました。一応計画は出来て、これから具体的な活動に入のですが、その運動は多摩川の河原、多摩丘陵、そこに流れている幾本かの川筋、いくつかの廃校になった小学校などそういうものを舞台にしながら、全市民が環境市民をめざし、活動してもらい、その姿全体、地域全体がエコミュージアムだとするものです。京浜工事務所という国の多摩川の管理事務所があるのですが、この管理事務所の2階に市民センターを作ってもらいました。このように国、市、県、市民、それから、川崎信金という地元の金融機関も入れて幅広いパートナーシップ型市民活動にしました。従来は、自然保護の活動といえば自然保護グループだけが集まっているし、町並み保存といえば歴

史系グループが集まるというふうになっていました。日本の市民運動は、本当に不思議なもので役所のように縦割り化しているのですが、多摩川エコミュージアムはそれをやめようと、自然系も歴史系もみんな一つになってエコミュージアム活動しようとやっています。私は、地域の自然資産をどうやって利用し、活用し、そしてその中で市民が教えたり学んだりしながら行う活動の全体像が、エコミュージアムであるという定義を行って、その活動をすすめております。時間だから終わらなければいけません。

レクリエーションとかレジャーとかの言葉をあまり使わないで終わってしまいましたが、整理して配布資料に書いてありますので、後でご覧いただきたいと思います。どうもありがとうございました。

(2001年12月1日 於：千葉大学)

## 〔基調講演配布資料〕

# レジャー・レクリエーションと自然環境

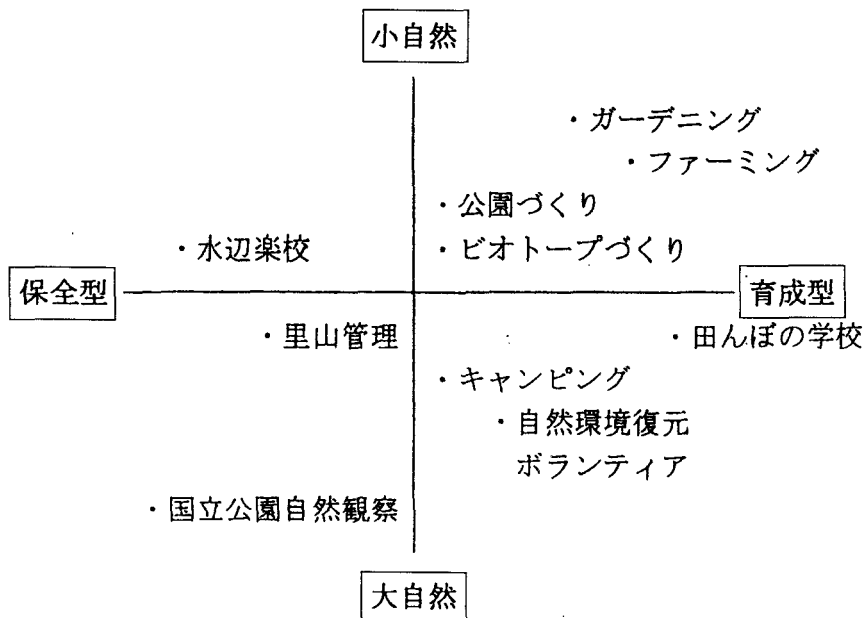
東京農業大学学長 進士五十八

### 1. 自然系レクの特性と意義

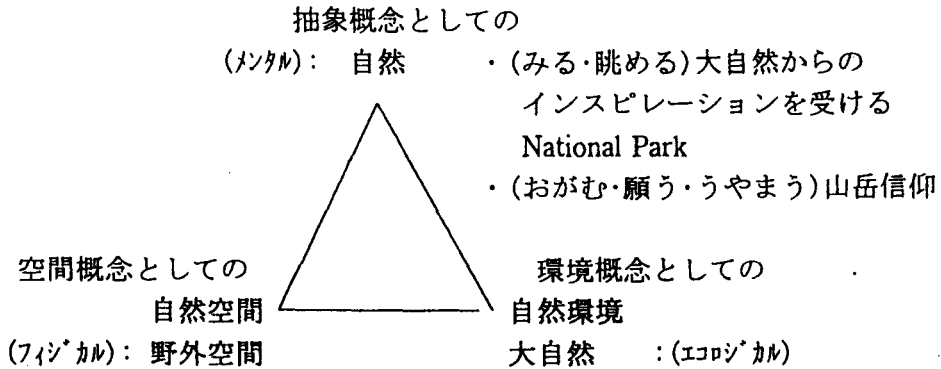
Outdoor Rec.や Forest Rec.など外部空間で、なおかつ自然環境でのレジャー・レクには特別の意味、時代的要請がこめられてきた。内部空間、施設ではなくて環境空間、しかも生物的自然が卓越した環境でなければならない点に意義が認められてきたからである。

### 2. 自然環境でのレジャー・レク活動

- ・ Active - Passive (動的 - 静的、育てる - する - みる)
- ・ Artificial - Natural (屋外 - 野外 - 大自然)
- ・ Physical - Spiritual (肉体運動 - インスピレーション)



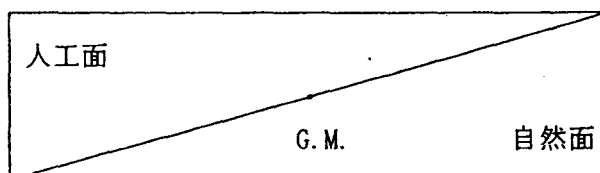
### 3. レジャー・レクにおける人間・自然関係（機能論）



- ・ (ふれる・さわる) 草木あそび
- ・ (つかう) 木のぼり トレッキング
- ・ (つくる) 炭焼き
- ・ (する) アスレチック
- ・ (あそぶ) カヌーイング
- ・ (すごす) キャンピング
- ・ (はいる) 登山
- ・ (つかる) 風景浴
- ・ (したる) 森林浴
- ・ (学 ぶ) 自然観察

### 4. レジャー・レクのための環境開発・環境計画

- ・ 活動の種別と環境要求のマッチング (スキーと積雪量、キャンプサイトと水、エコツーリズムと生物多様性など)
- ・ 入込利用者の行動特性とのマッチング (施設型か空間型か環境型か、立寄型か滞在型か、生物系自然環境期待型か否かなど)
- ・ 地域容量 (スペースキャパシティ) に適合した人工面/自然面の比率 (形率) と形態で計画する。
- ・ 適正スケールの開発規模かどうか
- ・ 適正スピードでの開発速度かどうか
- ・ 「地域らしさ」を意識したデザインかどうか (「Rural Landscape Design の手法」など)
- ・ 「場所性」を踏えた施設か、またデザインかどうか



## 5. 自然環境を生かすためのレジャー・レク運営

- ・環境・場所・種別にふさわしい自然への理解をもつ人材養成(ex. CONE 自然活動体験指導者資格など)

自然科学的知識と指導能力：ナチュラルリスト(N.P.)

ネーチュア ガイド

人間科学的                                : インストラクター

(行動)                                    カウンセラー

社会科学的                               : レクリーダー

- ・本当は自然のみならずこの他、土地の歴史・文化・産業・経済・社会全般にわたる博物的知識と指導能力が求められる。(ex. エコミュージアム)

### ●プロフィール

進士五十八 (しんじ いそや)

現 職 東京農業大学学長、地域環境科学部造園科学科教授、農学博士

略 歴 東京農業大学造園学科卒業、東京農業大学総研所長、農学部長、  
地域環境科学部長を歴任して1999年から現職

著 書 緑のまちづくり学、アメニティデザイン、風景デザイン、  
ランドスケープを創る人たち、環境市民とまちづくり、  
生き物緑地活動をはじめよう、自然環境復元の技術、  
「農」の時代、ほか多数。

学会活動 日本造園学会賞受賞、日本造園学会前会長、  
日本都市計画学会副会長、日本野外教育学会副会長、  
日本レジャー・レクリエーション学会理事、ほか。

社会活動 田村賞受賞、国土交通省社会資本整備審議会臨時委員、  
毎日新聞社持続可能な社会創造委員会委員など。